

『経済学批判』 「序言」における史的唯物論の「公式」について

島崎 隆(季報『唯物論研究』第114号、2010年所収)

従来私は、「実践的唯物論」の立場をマルクス主義の基本性格として認識してきたが、本論文はこの立場を、あらたに史的唯物論の分野にまで拡大して展開したい*1。この分野こそ、実践的唯物論の「核心」をなすものである。現段階で、この史的唯物論の構想はいかに再構築されるべきだろうか。そのさい周知のように、マルクスの史的唯物論（唯物史観）を語るときかならず言及されるのが、『経済学批判』の「序言」（一八五九年執筆）におけるいわゆる史的唯物論の「公式」といわれるものである。ここにおける「一般的結論」は、マルクス自身によって、自分の研究にとっての「導きの糸 Leitfaden」として役立つといわれる*2。これは、マルクス自身によってかなり明確に「定式化」されているので、権威をもって史的唯物論の説明に使用されてきた。そこには、いわゆる土台—上部構造論や「生産様式」の歴史的発展の理論が簡潔に述べられている。

だが、この史的唯物論の「公式」は単なる結果のみを記したものであり、さらに、マルクスの史的唯物論や経済学の認識形成の中段階で形成されたものとして、そこに見られる限界には注意を要する。これを十分に理解するには、マルクス自身の問題意識に深く内在しつつ再構成し、合わせて、マルクス自身の著述から多方面に渡って補足されなければならない。以下では、この「序言」における叙述を整理して、最低限三つの要素に区分し、それぞれを簡潔に説明したい（第一節—第四節）。そのさい、他の著作を検討しつつ、マルクス自身の実践的・主体的な問題意識から、とくに歴史的発展段階説について、疎外論的問題構成を念頭に置きつつ再構成したい（第五節）。最後に、自然環境問題を念頭に置いて、史的唯物論を自然のあり方と関連づけて考えたい（第六節）。

一 史的唯物論の三要素（「生活—意識」関係論）

史的唯物論の「公式」は少なくとも、以下の三つの要素を含むだろう。第一は、生活と意識の関係を問う「生活—意識」関係論とでもいうものであり、第二は土台—上部構造論、第三はアジア的生産様式から始まり、奴隷制的、農奴制的、資本主義的生産様式と叙述される、歴史的発展段階の叙述である*3。

第一の「生活—意識」関係論は、人間の生活と意識のありようとの関係如何という問題であり、「序言」の本文では、「人間の意識が彼らの存在を規定する (bestimmen) のでは

なくて、むしろ逆に人間の社会的存在が彼らの意識を規定する」といわれる。こうしてマルクスは、変革の時代を想定して、「こうした変革の時代を、その時代の意識から判断することは、ちょうどある個人が自分自身をどう考えているかによって、その人を判断するのと同じである」と釘を刺す。したがって、意識、さらに具体的には価値意識、規範意識、イデオロギーなどをそれ自身として説明するのではなく、その根底の「社会的存在」のあり方に遡って説明されなければ、正しい客観的な説明にはならないという。これこそ、マルクス自身の唯物論思想の第一の前提である。マルクスを遠く離れた現代においても、問題を人間の規範意識や道徳心の欠如に求めて、そうした問題が発生する社会的な客観的根拠を軽視する傾向は、根強く残っているといえよう。

この第一の点は、すでにエンゲルスとの共著『ドイツ・イデオロギー』で十分に展開された。「現実活動する人間たちに出発点が置かれ、そして彼らの現実的生活過程の側から、この生活過程のイデオロギー的な反映と残響の発展もまた解明されるのである。〔中略〕意識が生活を規定する (bestimmen) のではなく、生活が意識を規定する。」*4 こうしてマルクスは、意識、理念、思想を何か自立的存在とみなさず、それをたえず発生させる人々の現実的生活、その「社会的存在」のあり方から解明しようとした*5。さて、ここで私は、エンゲルスが『フォイエルバッハ論』第二節で展開した、いわゆる「哲学の根本問題」を再解釈したい*6。物質が先か（唯物論の立場）、意識が先か（観念論の立場）と（実はエンゲルスを誤解するかたちで）認識論的に想定されてしまったこの問題構成は、さらに現実的社会生活のなかで再設定されるべきである。つまり人々の意識や思想の基礎に彼らの「社会的存在」のあり方をまず承認するのか（唯物論）、否か（観念論）と変形されることができよう（前者を採用した場合、もちろん社会的発生源を変革しなければ、問題は解決されえない）。または、エンゲルスがこの根本問題を単に認識論的にではなくて、世界観的に展開したことを考慮すると、われわれ人間のあり方を基本的に規定するのは意識、思想と称されるものなのか（観念論）、それとも人々の現実生活や彼らの「社会的存在」であるのか（唯物論）、と問うことができるのである。

いずれにせよ、こうしてマルクスは、『ドイツ・イデオロギー』で意識・理念・思想を物質的世界から自立化させるドイツのイデオロギストたちを総批判したのであった。その総大将はまさにヘーゲルであって、そこで「絶対的」という形容詞をもった「理念」「精神」などは、その神的絶対性のゆえに、現実世界を現象形態として産出するものとされた。こうした転倒した観念論を、若きマルクスは「論理的・汎神論的神秘主義」と呼んだ*7。

二 土台—上部構造の二分法

しかし、この「生活—意識」関係論はまだ単純で抽象的である。ここにおける人々の「生活」とは何か。これをさらに具体化したところで、第二の「土台—上部構造」論が展開されるだろう。「序言」は述べる。「人間は彼らの生活の社会的生産において、一定の必然的な、彼らの意志から独立した関係を結ぶ。すなわち、彼らの物質的生産力のある一定の発展段階に照応する生産関係を結ぶ。これらの生産関係の総体は、その社会の経済的構造を形成する、すなわち法制的および政治的な上部構造 (Ueberbau) がそのうえにそびえ立ち、一定の社会意識諸形態 (gesellschaftliche Bewußtseinsformen) がそれ〔土台〕に照応するところの、現実の土台 (Basis) を形成する。物質的生活の生産様式は、社会的・政治的・精神的な生活過程一般を制約する (bedingen) 。」

一見明快に定式化されているにもかかわらず、多くの議論を呼んだこの箇所に関しては、まずは一種の建築学的比喩によって説明されていることに注意すべきであり、これにリアリティをもたせるには、多くの補足説明が必要である。たとえば、そもそもこの「公式」における一連の説明は一般的「法則」なのか単なる「導きの意図」なのか、土台と上部構造の規定・被規定の関係は具体的にいかなるものか、この構造ですべての社会現象が包含できるのか、さらに「社会意識諸形態」とその少しのちに「序言」で提示される「イデオロギー的諸形態 ideologische Formen」とは同じか否か、などの問題群である。

さて、上記に類似した表現は、すでに『ドイツ・イデオロギー』で出ている。そこではまず、ある発展段階での諸個人の物質的・交通の全体を包括し、さらに商業的および工業的な生活全体もまた包括する「市民社会」について説明される。これは本来的には、資本主義的ブルジョアジーとともに発展するが、だが、この「市民社会」は同時に、「あらゆる時代に国家、その他の観念論的上部構造 (idealistische Superstruktur) の土台 (Basis) をなす」*8 と述べられる。ここでは、まさに経済を司る「市民社会」が「土台」とされ、そのうえに国家などの「上部構造」が据えられている。だから、この『経済学批判』「序言」でマルクスが急に、この土台—上部構造論を思いついたわけではない。

私はこれらの問題群をすべてここで扱うことはしないが、土台—上部構造の二分法の問題点とこの両者の規定・非規定の問題に絞って考察したい。

第一の問題についてであるが、少なくとも、土台—上部構造論には、「物質的生活の生産様式」としての経済的「土台」と法的・政治的・制度的としての「上部構造」という二分法

がなされ、土台に照応する一定の「社会意識諸形態」がそれに付加される、と解釈できるだろう。この点で興味深いのは、「物質的生活の生産様式は、社会的・政治的・精神的な生活過程一般を制約する」という、さきに引用した文言である。この命題に注目すると、「物質的生活の生産様式」は文句なく「土台」にまず該当するといえよう。

ここで田畑稔は興味深い解釈をする。彼によれば、ここには①物質的生活の生産・再生産の領域、②社会的な生活過程、社会的編成ないし社会組織の領域、③政治的な生活過程ないし国家的編成の領域、④精神的な生活過程ないしイデオロギーの領域、が存在するという*9。ここでは①を基礎に、②→③→④という規定の順序が見られるとされる。とくに②の領域は、家族、身分、階級による社会編成のあり方とみなされる。これはいわば現代でいえば、社会学(sociology)という学問で扱われる、ソーシャルな領域といえるだろうか。従来、土台-上部構造の区分では、家族などはどこにはいるのかというような疑問も出たが、家族はこの②にはいるとされる。こうして田畑は土台-上部構造論よりも上記の四領域を重視するが、これはある意味説得的な見解であろう。ただここで気になるのは、上記の「社会意識諸形態」と、衝突しあう「法律的・政治的・宗教的・芸術的または哲学的な、簡単にいえばイデオロギー的諸形態」とが同一に扱われていることである。この異同には論争もあり、未解明な部分である*10。この部分をとっても、この「公式」的な表現は、その一見した明快さにもかかわらず、不分明な箇所が多いのである*11。

三 土台-上部構造の規定・被規定の関係

さて次に、ハーバマース『史的唯物論の再構成』での問題提起を中心に紹介・検討したい*12。彼は世界史における大文字の単一主体による歴史発展という構想を批判しつつ、土台と上部構造の規定の関係について、①強度の因果論的解釈(プレハーノフ)、②「最終審級において in letzter Instanz」土台が上部構造を決定するという解釈(ラブリオーラ、マックス・アドラー)、③ヘーゲル・マルクス主義的に、建築学的階層のモデルを放棄して、経済的本質が上部構造に顕現するという解釈(ルカーチ、コルシュ、アドルノ)、を列挙する。上記の①はまず採用されえないだろう。この点では、晩年のエンゲルスのヨーゼフ・ブロッホ宛の手紙(一八九〇年九月)が参考となる*13。それによれば、エンゲルスもマルクスも、その「唯物史観」に従えば、「歴史における究極の規定要因」は、「現実的生活(生命)の生産と再生産」であって、それ以上のことをかつて主張したことがない。経済的要因が「唯一の規定要因である」というようにねじ曲げるのは、無意味なこと

である、という。さらにエンゲルスは、歴史のなかで多くの要因が相互作用をしていることを強調し、若い人々がしばしば経済的な側面を過度に重視していることについては、マルクスと私自身がその責めの一部を負わなければならない、と反省もまたしている。この手紙には、「力の平行四辺形」から生ずる合成力によって歴史の運動を説明する箇所など問題をはらむ部分もあるが、いずれにせよ、この見解はおそらく、上部構造から土台への反作用の承認を含めて②を支持するといっていいただろう。

さて、③はヘーゲル主義的思弁の匂いがしないでもないが、ここではマルクス自身が、『経済学批判要綱』「序説」（一八五七年八月執筆）の第三節「経済学の方法」で述べたことが参考となるだろう。この箇所のマルクスによれば、ある社会での主要な生産形態が他の生産形態に「順位 (Rang) と影響力を指定する」。こうして、主要な生産形態が「普遍的照明」となって、後者の形態を変容させるのである* 14。さらに、生産が「包括的契機」* 15であり、消費などの他の要素は、生産の従属的契機になるともいわれる。マルクスはここで芸術、宗教や歴史一般に言及するものの、おもに生産・消費・分配などの経済学的テーマについて述べており、上記の土台—上部構造の話までは具体化されていないので、まったく同列には扱えないであろう。だが、上記の「序言」と比べると、この「序説」ははるかに弁証法的であって、上記の③もある意味で、マルクス自身が首肯しないとばかりは言えない。以上の点で、「物質的生活の生産様式」（「土台」）が上部構造の諸側面を「契機」として包含するという表現は可能であると思われる。この意味で、前者は後者を、その「順位」と「影響力」によって位置づけるのである。つまり、上記の②は③と矛盾はしないように解釈できる可能性がある。もちろん③は、経済決定論的なかたちで強度に解釈されてはならず、すべては客観的事実のありように従わなければならない。

以上のように考えると、マルクス本人が叙述したとはいっても、土台—上部構造という比喩的表現は、あらゆる社会制度や意識形態の根底に実体として存在するはずの「物質的生活の生産様式」「経済的土台」をまず強調する点にのみ意味がある。それは何か教科書的叙述に適しているように明快に見える分だけ、誤解されやすいものといえよう*16。さらに付加すれば、そこには、疎外論や物象化論の、マルクス自身の実践的・主体的変革の問題意識も明確には見られない。とくに、経済的「土台」の想定は、それが余りにも動きのない実体として措定されているので、誤解を誘発しやすいものである。その点でさきの田畑の解釈は有益であり、そうすると、社会の全体について、「物質的生活の生産様式」を主要契機として、社会的制度編成、意識形態などを重層的なかたちで副次的契機とみな

すほうが、より弁証法的で、誤解がないであろう。その意味で私は、『経済学批判要綱』の「序説」の「経済学の方法」を参照したのであった。

いずれにせよ、フロイトが意識の深層構造にある無意識を発見したとすれば、マルクスは全生活の「土台」としての「物質的生活の生産様式」を社会の基盤として発見したのであり、せいぜい「汚らわしいユダヤ人的な現象形態」*17（フォイエルバッハの第一テーゼ）として蔑視されてきた経済的実践活動を正確に位置づけたのである。ところで、労働や生産を第一の人間的な活動とする資本主義社会では、経済現象重視のマルクスの史的唯物論は妥当するが、前近代的社会では妥当しないという批判もないわけではない。たしかに物質的要素や経済活動（労働と生産）が重視されたのは、ようやく近代資本主義においてであるが、前近代でも、それが現実生活の基盤であったことに変わりはない。だが、それは前近代では、フロイト風にいえば、いわば不可視の深層構造であったのだ。

四 歴史的発展段階説

第三の点であるが、史的唯物論は一種の歴史的発展段階説をとる。いままでに見たように、土台—上部構造をもった社会構成体の全体が歴史的にいかに変化し、新しい生産様式に支えられた社会の全体に生成・発展していくのが問題となる。マルクスによれば、その変化の原動力は、社会的生産力と生産関係の間の矛盾・衝突である。ひとつの社会構成体は、そのうちですべての生産力が発展しなければ、没落しないのである。こうして、マルクスは以下の四つの「経済的社会構成体」を累進の時期として位置づける。「ごく大づかみにいえば、アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的の生産様式が、経済的社会構成体の累進の（progressiv）時期として特徴づけられることができる。ブルジョア的生産関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。」

一見して明瞭なこうした定式化の表現にも、やはり同様に多くの論争点が含まれている。たとえば、そもそも「生産様式」と「経済的社会構成体」とはどう違うのか、最初の「アジア的的生产様式」というのは、いかなる性格のもので、なぜここに入れられているのか、いわゆる「資本主義的生産に先行する諸形態」（『経済学批判要綱』）で描かれた共同体論はこの歴史的発展にどう関わるのか、こうした発展法則は全世界的に普遍妥当性をもつのか、などの問題群である。

ここで「アジア的生產様式」についての論争について詳論できないが、その論争の中心人物であった福富正美は、紆余曲折のあるマルクスのアジア的生產様式概念について、西

欧の古典古代的生産様式に先行するもので、「『資本論』第一部…において、アジア的生産様式は、家父長制的隷属にもとづく『古代的アジア的生産様式』として厳密化された」と結論する*18。私はこの問題を論評する能力をもたないが、この歴史的発展段階説を再構成するという意味であえて言及したい。いずれにせよ、このアジア的生産様式は、階級的差別のない原始共同体ではないといえる。もし史的唯物論による歴史的発展段階説をできるだけ一般化するとすれば、マルクス自身が認めている無階級の原始共同体を歴史の出発点に採用することが許されるだろう。さらにまた、アジア的生産様式は、奴隷制、封建主義などと並ぶ一般的なものではないと見られる。そして、将来社会としての社会主義・共産主義を付加して、以下のような発展段階が従来構想されてきた*19。

原始共同体（共産主義）—奴隷制—封建主義—資本主義—社会主義・共産主義
(無階級社会) (階級社会) (無階級社会)

以上のように、マルクスの歴史的発展段階説を再構成し、その根底に生産関係との照応→不照応の関係と、それに由来する生産力の上昇と、以上を基礎におこなわれる階級闘争の理論とを付加することができるだろう。周知のように、こうした五段階発展説については、従来多くの歴史学者などが実証的かつ価値的な観点から疑問視してきた。私はここで、二つの大きな問題に絞って考えたい。第一の問題は、この「序言」のマルクスの意図は、「導きの糸」「ごく大づかみにいえば」などの言語表現から推察すると、何か実証的にも体系的にも厳密な検討ののちに展開されたものではないのではないか、ということである*20。それを後世の人々が金科玉条視してしまったのではないか。こうした発展段階説はすでに表面的には当時いわれており、マルクス自身のまったくの独創ではない。そして、厳密に考えれば、全世界が以上の五段階を厳密に経過するなどとは、マルクス自身も了解しなかったであろう。「経済的社会構成体の累進の時期」といっても、ひとつの地域でそう発展するというのではなくて、浜林正夫が指摘するように、「地域的にいえば、アジアからギリシャ・ローマへ、さらにゲルマンへ、そして資本主義の『祖国』イギリスへと、西方へうつっていったものとみななければならない」*21。たとえば、ヘーゲル歴史哲学がそういったモデル（東洋的—ギリシャ的—ローマ的—ゲルマン的）を明示したのである。とはいえ注意されるべきは、資本主義は、「資本の偉大な文明化の影響 the great civilizing influence of capital」*22によって地域的局限性を超えて、全世界を支配する傾向をもったということである。

第二は、これらの歴史的発展は、価値的に望ましい観点を含むのか否かという問題であ

る。小谷ひろ之はこの点について、ヨーロッパ中心主義を批判するアジア的価値の独自性の立場から、人類学者石田英一郎を継承して、科学技術、産業経済などの「実在の文化」は継続的に蓄積されていくが、「価値の文化」には進歩・発展は成立しないと主張する*23。物質的生産の豊かさが、「精神的生活過程」の向上・発展を保証するとはかぎらない。各社会の「価値の文化」は絶えず破壊されるが、それでも、その価値はそれぞれ絶対的とされる。この意味で、小谷によれば、丸山真男、大塚久雄らにあった「価値としての近代」という考えは誤りだといわれる。この錯綜した問題への対応は現時点で避けて通れない問題であるが、物質的発展と精神的発展をまったく切り離したり、西洋の近代市民社会の理念、人間観、制度などの意義をまったく否定したりするのであれば、その立場は史的唯物論の見地から離れることになるだろうということを述べておくに留めたい。

実は、ここで詳論できないが、マルクス自身、段々とその歴史観を複雑化させてきている。この点でマルクスは、『祖国雑記』編集部宛の手紙（一八七七年）で、超歴史的な「普遍的歴史哲学理論」などありえないという趣旨のことを述べている*24。さらにそこで、『フランス語版資本論』（原書一八七五年、三一五頁）が参照されているが、これはマルクスが直接校訂した最後の『資本論』の版といわれる。この版の本源的蓄積論の部分では、生産者と生産手段の分離、つまり生産者の収奪が根本的になされ、資本主義が展開されているのはいまなおイギリスだけであり、だが、西ヨーロッパの諸国もこの歴史過程をたどると指摘される*25。こうしてこの箇所は、歴史的発展段階の妥当性を西ヨーロッパに限ると宣言した点で知られている。

さらに、周知のように、ロシアの運動家であるヴェラ・ザスーリッチ宛の手紙（一八八一年）でも、ロシアでは、村落共同体が没落せずに、資本主義的搾取を免れて社会主義を建設することにつながる可能性はあるのかという問いにたいして、マルクスはやはり『フランス語版資本論』の同じ箇所を示している*26。手紙のための第一草稿でマルクスは、大昔の「原古共同体」の存在を想定しつつ、ロシアでは、残存する農村共同体が資本主義的私的所有に飲み込まれるか、この共同体が生き残り、社会主義的な集団的所有に寄与できるかという「二者択一」がここに存在するという*27。したがって、後期のマルクスは、複線的な歴史観を採用し、いわば「二者択一の歴史観」を説いたということもできよう。この点で、山之内はこの手紙を分析して、「農業問題の解決が資本主義発展の自然史的過程にゆだねられるべき問題としてではなく、変革者による目的意識的取り組みの対象としてとらえられていることは、注目に値しよう」*28と指摘するのである。

それでは、『経済学批判』「序言」から再構成されたあの歴史的発展段階説はどうなるのか。私見では、この構想は、イギリスなどの先進国の現実から把握された、一種のモデル的表現とみなすことが可能と思われる。このモデルは、それによって人々が当該の多様な現実を測定し、再認識し、価値づけることができるような、それ自身有意味で整合的な一般的規定である。まさにそれは「導きの糸」なのである。それが直接的に妥当するのは、西ヨーロッパ世界のみであるが、そこにおいても、多様な歴史的過程が現実には見られるであろう。

とはいえ、歴史的発展段階説に限っても、これだけの見方だと、客観主義的になる恐れがある。もちろんマルクスの歴史観はそれ以上の豊かさをもつ。以下では、そうした論点のいくつかを素描しよう。

五 マルクスの実践的・主体的な問題意識と史的唯物論

革命家マルクスの根本的意図は、いうまでもなく、眼前に展開されている資本主義的現実を対象に、そのなかで繰り広げられる、労働者を初め人々の貧困状況や差別に由来する疎外的状況を打破し、疎外のない、階級的不平等のない共産主義的な共同社会へと前進することであった。この意図を実現するための学問的装置として史的唯物論が働かなければ、それは存在意義をもたない。私はここでとくに、第三の歴史的発展段階説を中心に、そこでいかなるマルクスの実践的意図が働いているのかを改めて考察したい。

こうして見ると、「序言」で定式化されたものよりも、その素朴な前駆形態のほうに、彼の意図が透けて見えることがある。マルクスの歴史的発展段階の萌芽的形態がいわゆる『経済学・哲学草稿』に見られる。

それは、第一草稿の「地代論」のなかで議論されている*29。まずマルクスは、「封建的土地所有」から「資本主義的私的所有」への発展を描く。もちろん前者も、領主が支配する土地から「人間〔農奴〕が疎外されており」、同時に「農奴が土地の付属物になっている」という矛盾を含む。だがそれでも、封建主義には何か人間関係に「内面性」があり、「人情的な側面」をもつように見えるといわれる。この意味でここには、何らかの人格的關係が存在するといえよう。ところが「資本主義的私的所有」になると、人間関係がまったく没个性的になり、「財布」（貨幣）がものごとを結合する存在になって、「所有者とその所有物との人格的關係（persönliches Verhältnis）がすべて廃棄され」、「資本の純粹支配」が、そして「人間にたいする死せる物質の完全支配」が表現される。だが、賃金

の一層の切り下げを目指す資本の運動は、労働者による「革命」を引き起こすだろう。封建主義も没落するが、資本主義も自滅する必然性をもつ。その結果、「アソシエーション Association」の関係が出現し、それが「理性的な仕方、人間と土地との情愛に満ちた関係を再建する」。ここに「人格的な所有 (persönliches Eigentum)」も達成されるのである…。

マルクスは土地との関係で人間を描いてはいるが、ここに人間相互の社会的関係を合わせて考えてもいいだろう。以上の展開は、ラフではあるが、「封建主義→資本主義→共産主義」の展開を物語っている。しかもその発想の根底にあるのは、少なくとも、封建主義までは何らかの形で残存していた人間と土地の共同体的関係が資本主義で破壊されるが、さらに共産主義的アソシエーションが、再度、共同的所有を復活するということである。だが他方、マルクスにとって、「資本の偉大な文明化作用」を達成した資本主義は、ある意味人間形成にとって必然的な歴史過程であり、ここで科学・技術にもとづく高度な生産力と個人の形式的な自由・平等が獲得される。だが、この資本主義もその矛盾ゆえに没落し、再度、マルクスが想定する共同体が高次元で復活するのである。ここにマルクス史的唯物論の実践的展望がある。彼は共産主義を単なる主観的なユートピアとして待望したのではなく、過去人類史に共同的关系が延々と続いてきたからこそ、さらにその共同的关系が資本主義のなかにも潜在化して（疎外されたかたちで）存続しているからこそ、それを高次元で復活できると展望したのである*30。さきのザスーリッヂ宛の手紙でも、しばしば原始共同体の高次元での復帰が想定される。

さて、マルクスが『経済学批判要綱』（一八五七年）で、三段階の依存史観とでもいうべきものを展開したことはよく知られている*31。彼はそこで、最初の社会形態として「人格的な依存関係」を描くが、これこそ、さきに描かれた封建主義までの状態である。次の第二の形態は、商品・貨幣・資本という「物象的依存性のうえに築かれた人格的独立性」であり、これはさきの資本主義の個人の状態を描く。そして第三段階として、「共同体的・社会的生産性」をともなった「自由な個性」が出現するが、これこそアソシエーション的共産主義である。ここでもマルクスは、人格的な共同性を、資本主義社会の達成物のうえに再建するべきであるという展望を示したのである。これはある意味で、弁証法的な「否定の否定」による、高次元での共同性と個性性の統合といえよう。こうした展望の裏づけなしの実践は、マルクスでは「ドン・キホーテ的愚行」といわれる。なおマルクスは、『資本論』で、「個人的所有の再建」の構想を資本主義克服の段階で示したが、そこでは

はっきりと「否定の否定」の弁証法を明示している*32。この「個人的所有の再建」によってこそ、『要綱』の「自由な個性」は確保できるといえよう。また、『賃金・価格・利潤』（一八六五年）では、やはり本源的蓄積過程を分水嶺に置いて、労働する者と労働手段の間で、「原結合」（封建主義まで）→「解体・分離」（資本主義）→「原結合の復活」（将来社会）という三段階的構想を提起する*33。

以上のような三段階的な発想法こそ、いかにして実践的変革を説得的にするかという意図および展望を具体化したものであって、さらにこうした構想こそ、さきの歴史的発展段階説を内部から支えるものである。逆にいえば、客観主義的に史的唯物論の「公式」を理解しないためには、疎外論や物象化論を意図的に折り込んだ、上記のような主体的なとらえ返しが不可欠と考えられる。

六 史的唯物論と自然（史的過程）の問題

人間の社会や歴史の問題を中心に扱うとされる伝統的マルクス主義の史的唯物論においては、自然環境の問題への取り扱いやエコロジー的発想は希薄であった。一九七〇年代以後、公害などが問題視されたのちにも、環境問題への対応は何か外挿法的にマルクス主義に付加される傾向があった。そのなかで、すでにアメリカの経済学者ジェームズ・オコンナーは資本主義内部の生産力と生産関係（さらに資本-賃労働関係）の矛盾・対立を「資本主義の第一の矛盾」と名づけるとともに、資本-自然関係で生ずる搾取・破壊の関係を「資本主義の第二の矛盾」と名づけて、エコロジー的マルクス主義の成立の方向性を明確化した*34。さらに他方、一九七〇年代以後、日本でもマルクス、エンゲルスのなかにエコロジー的傾向を発見する立場が徐々に現れてきたが、最近、地球環境問題を背景に、ジョン・フォスターは、まさに『マルクスのエコロジー』と題して、マルクス自身が正真正銘の唯物論的エコロジストであると言明したのである*35。

マルクス自身が問題意識を社会や歴史の領域に限定し、自然問題にはそれほど関心がなかったという見解は、多くの研究蓄積によって、いまや十分に反駁されている。マルクスの史的唯物論の発想においても、自然問題は原理的に二義的なもの、追加的なものというわけではなくて、むしろ人間のありようを考えるさいに、社会の問題と自然の問題は密接不可分に絡み合っているということの認識が大事なのである。たしかにマルクスは、まとまった意味で自然に関する著作を残さなかったが、生涯一貫して自然問題に彼が関心をもっていたことは、初発的には、フランクフルト学派のアルフレート・シュミットが詳細に

明らかにしたのである*36。いうまでもなく、マルクスは労働と生産による自然の変革を社会発展の原動力のひとつに置くのであり、あたかもありのままの自然を対象とする自然哲学を主張するフォイエルバッハを、『ドイツ・イデオロギー』で「産業と交易がなかったならば、どうして自然科学などありえようか」、人間の手を加えられない自然は「今日ではどこにも現存しない自然である」*37と批判する。自然自体が人間の労働と文化の産物であるということは、マルクスの実践的唯物論の中心的主張のひとつである。だが、だからといって、自然全体がすべて社会的産物であるわけではなく、マルクスはいわゆる社会構築主義を唱えるわけでもない。他方でマルクスは、『経済学・哲学草稿』で聖書の天地創造説を批判して、「地球の形成、大地の生成」を主張したり*38、ダーウィンの進化論をおおいに歓迎し、彼に『資本論』を献呈したりした。進化論こそ唯物論の勝利を意味し、人間もまさに自然の自己運動の産物でしかありえない。マルクスにとって、高度の精神性を誇る人間も、「労働力をもつ単なる定在として見れば、ひとつの自然対象であり、…ひとつの物である」*39とみなされる。

以上に見られるマルクスの人間重視と自然重視の両側面は、たとえば彼の労働観において統一されて現れる。「労働はさしあたり、人間と自然のあいだのひとつの過程、すなわちそこにおいて、人間が自然との物質代謝 (Stoffwechsel) を自分自身の行為によって媒介し、規制し、統制するひとつの過程である。」*40 一方では労働は、人間による目的合理的な自然への働きかけという主体的側面をもつが、他方ではそれは、生命の維持活動に結果する物質代謝という客観的過程である。後者の側面はすべての生物が本能的におこなっていることであり、そこには自然界における物質とエネルギーの客観的循環過程が存在する。もし前者のみが取り出されれば、人間の偉大さを称揚する近代主義がそこにあるといわれてもやむをえないだろう。ここからマルクスが、その生産力主義と技術主義によって、環境破壊に与するとも見られてきた。だがそこに、物質代謝という労働過程の構想も見られるのであって、ここからは、産業活動においても、人間と自然のあいだに健全な物質循環を確保することが必要であるという考えも発生する。むしろマルクスのこの二面的な労働観こそ必要なのであり、ここにマルクスの唯物論はエコロジー化するひとつの基盤を得たのである*41。

こうして、本論第二節で述べられた土台—上部構造論でいえば、その社会の基盤に自然というさらなる「土台」が要請されるだろう。ある意味、自然は人間にとって根源的であり、人間はその自然の一部である。さきに述べたように、マルクス自身、自然自身の自己

運動とそこからの人間の出現という自然史的・進化論的過程を想定する。これはエンゲルスの自然弁証法の構想とも合致する発想であろう。したがって、史的唯物論の対象である人間の歴史は、自然の歴史の延長の過程である。それどころかマルクスは、「経済的社会構成体」の発展自体も「ひとつの自然史的過程」*42とみなす。若きマルクスにとって、自然史と社会の歴史は別個ではなく、「〔人間の〕歴史そのものは自然史の現実的な一部分であり、人間への自然の生成の現実的な一部分である」*43とされるように、両方の歴史は融合的に一体化している*44。まさに人間と自然の間の物質代謝に見られたように、労働過程は自然と社会の接点であった。そして、史的唯物論の究極目標である共産主義とは、単に、資本による人間の搾取と支配の終焉を意味するのみではなく、労働者全体による物質代謝の「共同的統制」*45 によって、人間－自然間の調和的關係を築くこともまた意味する。こうして、将来社会において、自然の道具化による自然（地力）の「搾取 Exploitation および濫費 Vergeudung」*46もまた、廃絶されなければならない。

以上のようにして、マルクスの史的唯物論の構想では、自然環境問題の解決が不可欠な要素となっているといえよう。

*1 実践的唯物論の立場の展開は、拙著『ポスト・マルクス主義の思想と方法』（こうち書房、一九九七年）では、「社会主義崩壊後」の状況を深刻に踏まえて詳細におこなわれている。かつて一九七〇年代以後、史的唯物論の理論構造はきわめて緻密に分析されてきたが、この「社会主義崩壊後」の状況において再考される必要がある。たとえば、服部文男編集『史的唯物論と現代』第二巻（理論構造と基本概念）、青木書店、一九七七年所収の諸論文を参照。

*2 Vgl. MEGA II-2, S. 100. 翻訳委員会訳『資本論草稿集』③、大月書店、二〇五頁。以下「序言」の引用はS. 100f. 二〇五頁以下の範囲にあるので、引用箇所を省略する。

*3 こうした三区分は大体、望月清司のものと同一である。森田桐郎・望月清司『社会認識と歴史理論』日本評論社、一九七四年、二五五頁を参照。

*4 Marx/Engels/Weydemeyer, Die Deutsche Ideologie. Text, in: Marx-Engels-Jahrbuch, Amsterdam, 2003, S. 115f. 渋谷正版『ドイツ・イデオロギー』新日本出版社、一九九八年、三六頁。

*5 この点では、理念の自立という、いわば物象化に関わる現象について展開したものとして、田島慶吾「物象化論－理念の自立」、岩佐・小林・渡辺編著『「ドイツ・

イデオロギー」の射程』創風社、一九九二年所収、が興味深い。

*6 MEW21, S. 274f.

*7 MEW1, S. 206.

*8 Marx/Engels/Weydemeyer, Op. cit., S. 93. 前掲渋谷版、一七〇頁。なお、植村恒一郎『マルクスのアクチュアリティ』新泉社、二〇〇六年、四九頁以下は、マルクスに先行する思想家の土台・上部構造論を詳細に考察しており、興味深い。

*9 田畑稔『マルクスとアソシエーション』新泉社、一九九四年、三二頁参照。とすると、土台・上部構造的な「公式」とこの四段階の発展図式の関係が問題となるだろう。この点では、「過程＝存在」と「構造＝本質」を区別する中野徹三に依拠する、鷺田小弥太『唯物史観の構想』批評社、一九八三年、一四二、二三〇頁の図式を参照。

*10 山之内靖はカール・コルシュに依拠して、現実的土台に照応する実在性をもつ「社会意識諸形態」と「倒錯した意識」であるイデオロギーとを区別する。これにたいして沖浦和光は、この両者が厳然と区別できないとして、山之内に疑問を呈する（現代の理論編集部・編『マルクス・コメンタール』IV、現代の理論社、一九七二年、三九頁、一〇七頁など）。なお同書は、『経済学批判』「序言」ないし史的唯物論の「公式」を論争風に詳細に解釈したものであるが、本報告でのちに展開する歴史的発展段階説については、残念ながら議論されていない。

*11 渡辺憲正は、興味深いことに、資本家やプロレタリアートの「経済的意識」の存在を提起し、それがイデオロギー的形態と相互作用はするものの、土台に直結している意識であり、上部構造に属さないことをまず確認すべきであるという。渡辺憲正『イデオロギー論の再構築』青木書店、二〇〇一年、二三頁以下参照。

*12 Juergen Habermas, Zur Rekonstruktion des Historischen Materialismus, Suhrkamp, Frankfurt am Main 1995, S. 157f. 清水多吉監訳『史的唯物論の再構成』法政大学出版局、二〇〇〇年、一八四頁以下参照。

*13 MEW37, S. 462ff.

*14 MEGA II-1.1, S. 41. 前掲『資本論草稿集』①、五九頁以下参照。

*15 Ibid., S. 30. 前掲訳、四一頁。

*16 マルクス本人が述べているのだから、それは適切に要約され、定式化されているはずだとは、必ずしもいえないだろう。私は別の一例を、マルクス自身の弁証法の定式化の試みに見る。私はそういう趣旨で、マルクスの「弁証法」の説明項目のなかで、まず「マ

ルクスは弁証法のエッセンスを的確に定式化しえたか？」と表現したのである。編集委員会編『マルクス・カテゴリー事典』青木書店、一九九八年、四九一頁以下参照。

*17 MEW3, S. 533.

*18 福富正美「アジア的生産様式」、前掲『マルクス・カテゴリー事典』、八頁など参照。アジア的生産様式などという「それ〔古い社会的生産有機体〕は、他の人間との自然的な類関係の紐帯からまだ離れていない個人的人間の未成熟にもとづいているか、または直接的な支配隷属関係にもとづいている」 (MEGA II-10, S. 77. 刊行委員会訳『資本論』①、大月書店、一〇六頁) などが典拠である。

*19 たとえば、スターリン『弁証法的唯物論と史的唯物論・他二編』(石堂清倫訳)国民文庫、一二八頁を参照。

*20 この点では、「歴史観」と「歴史の学」を区別する、前掲『唯物史観の構想』、五二頁以下の考察を参照。

*21 浜林正夫『現代と史的唯物論』大月書店、一九八四年、一四八頁。

*22 MEGA II-1, 1, S. 321. 前掲『資本論草稿集』②、18頁。

*23 小谷ひろ之『歴史の方法について』東京大学出版会、一九八五年、六七頁以下参照。ヨーロッパ中心主義批判と異文化・多文化の問題については、拙著『現代を読むための哲学』創風社、二〇〇四年の第二章、第三章で詳論したので、参照願いたい。たしかにマルクス主義側も、こうした問題にもっと関心をもつべきである。

*24 MEW19, S. 112.

*25 江夏美千穂・上杉聡彦訳『フランス語版資本論』法政大学出版局、一九七九年、三九五頁以下参照。

*26 MEW19, S. 242.

*27 MEW19, S. 388f.

*28 山之内靖『マルクス・エンゲルスの世界史像』未来社、一九六九年、二八一頁。最近では、生産様式接合理論、周辺資本主義論による、新しいマルクス読解が見られる。明石英人「マルクス『ロシア農村共同体』論の射程」(的場昭弘編『マルクスから見たロシア、ロシアから見たマルクス』五月書房、二〇〇七年)を参照。

*29 MEGA I-2, S. 230ff. 山中隆次訳『パリ草稿』御茶の水書房、二〇〇五年、五八頁以下参照。

*30マルクスの疎外論的問題構成については、拙論「弁証法における『否定』および『

否定の否定』の成立」（岩崎允胤編『科学の方法と社会認識』汐文社、一九七九年所収）の第三節以下参照。

*31 MEGA II-1, S. 90ff. 前掲草稿集、①、一三六頁以下。

*32 MEGA II-10, S. 685. 前掲『資本論』②、九九五頁。

*33 MEW16, S. 131. この点で、興味深いことに、日山紀彦「マルクス『歴史哲学』の基幹構図と『アソシエーション論』」（季報『唯物論研究』第八三号、二〇〇三年、一九頁）は、前掲の田畑を批判的に継承して、「自生的共同体型—商品交換社会型—アソシエーション型」とやはり三段階的に歴史的発展をとらえる。

*34 James O'Connor, Natural Causes, New York/ London, 1998: The Guilford Press. 所収の第八章「資本主義の第二の矛盾」を参照。

*35 ジョン・ベラミー・フォスター『マルクスのエコロジー』（渡辺景子訳）こぶし書房、二〇〇四年。

*36 アルフレート・シュミット『マルクスの自然概念』（元浜清海訳）法政大学出版局、一九七八年を参照。

*37 Marx/Engels/Weydemeyer, Die Deutsche Ideologie, S. 10. 前掲渋谷訳、五〇頁。

*38 MEGA I-2, S. 397. 前掲訳『パリ手稿』、一四五頁。

*39 MEGA II-10, S. 183. 前掲『資本論』①、二六五頁。

*40 MEGA II-10, S. 162. 前掲『資本論』①、二三四頁。

*41 この点に関しては、拙著『エコマルクス主義』知泉書館、二〇〇七年、第一章を参照。

*42 MEGA II-10, S. 10. 前掲『資本論』①、一〇頁。

*43 MEGA I-2, S. 396. 前掲訳『パリ手稿』、143頁。

*44 この点では、梯明秀『物質の哲学的概念』青木書店、一九六七年、などに始まる、かつての自然史的過程の構想があらたに再検討されるべきである。

*45 MEGA II-15, S. 795. 前掲『資本論』⑤、一〇五一頁。

*46 MEGA II-15, S. 787. 前掲『資本論』⑤、一〇四〇頁。